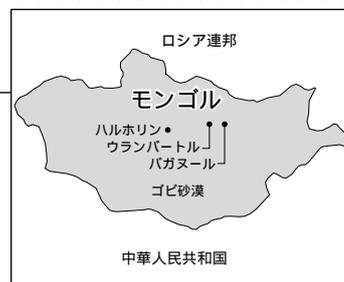


ユニセフ 子ども物語

地球に生きる子どもの暮らし

Mongolia

モンゴル



友だちみんな でできること



学校近くにあるアパートや市場をまわって、今日も生徒たちがあき缶やあきびんを集めています。そのひとり、アルタンギレル君はウランバートル第16学校に通う15歳。子どもたちが同じ年代の支援を必要としている子どもたちのために活動する、「チャイルド・トゥ・チャイルド（子どもから子どもへ）プロジェクト」にクラスの仲間と一緒に取り組んでいます。

って、アパートに住むおばさんたちや市場で働くおじさんたちが、売れそうなゴミを生徒たちのためにとっておいてくれるようになりました。また、別の友だちはカシミアの上履き、帽子などのハンドイクラフトを作って販売することを考えつきました。こうして、ゲルの代金250ドル分が集まったのです。



アルタンギレル君が通っている学校のクラスメートは、いろいろな問題をかかえています。全校生徒1678人のうち46%が片親と暮らしているか孤児です。経済的に苦しく、ひとりで

悩みを抱えて解決できずに精神的にもつらい状況にある友だちが多いのです。そこでクラスメートみんなでどんな支援ができるのかを話し合い、手紙の交換で精神的なサポートをすることになりました。

ウランバートルの町はずれにある丘のふもとに、ゲルが組み立てられました。母親のツロンツェツェグさんは、ま新しいゲルの前で「第16学校の生徒のみなさんに心から感謝しています。心のこもったこのゲルは私たち一家に生きる希望を与えてくれました。いま、私もハンドイクラフトの販売をして自立の努力をしているんですよ」と嬉しそうにアルタンギレル君たちに話してくれました。



手紙の交換のなかから、第16学校に兄弟5人が通っている母子家庭で、その他の兄弟もあわせて10人の子どもが住む家を必要としていることがわかりました。そこで、アルタンギレル君たちは5人の友だちと母親と話合って、家族が安心して住めるゲル（モンゴルの伝統的な家屋）を贈る活動をはじめたのです。お金をくれる人を探そうという意見もありましたが、ヒシユケ先生の「仲間の支援には自分たちの力で取り組もう」というアドバイスを受けて、自分たちでお金を集めることにしました。

多くの友だちが捨てられた動物の骨やあき缶・あきびんを拾い集めてお金に換える作業に取りかかりました。子どもたちの活動を知



子どもでもみんなで力をあわせればそれが大きな力となって、自分たちで問題を解決できることがわかり、アルタンギレル君たちは自信を持つことができました。ピービシユ校長先生も「助け合い、協力しあっ

てみんながそれぞれの才能を発揮させることが大切なことです」と応援してくれています。第16学校の生徒たちはもっともっと協力しあって、明るく楽しく学校に通えるようにすることをお互いに約束して、「チャイルド・トゥ・チャイルド・プロジェクト」を続けています。

(文・構成：日本ユニセフ協会)



ウランバートルの町並 ©日本ユニセフ協会

2002年7月20日からおよそ1週間、(財)日本ユニセフ協会はモンゴル指定募金に参加している学校を代表して12人の先生とともに、都市での地域住民を巻き込んだストリートチルドレン保護の取り組みと、地方都市でのストリートチルドレンを出さないための貧困家庭への支援プロジェクトを視察しました。

1990年に市場主義経済へ移行してからモンゴルの経済は低迷を続けており、インフレはかろうじて落ち着きを見せはじめたものの、失業率が高まり貧困家庭が多くなってきています。経済的な理由による離婚が増え、貧しいために子どもの養育を放棄したり、虐待したりする親も増加し、家庭崩壊が広がっています。子どもたちは生きていくために、路上でお金をねだったり、車の窓を拭いたり、タバコを売ったりして生活費を稼ぐようになりました。さらに政府からの基礎教育などへの補助金も削減されて社会サービスの質が低下し、子どもが学校を中途退学する要因になりました。また、最近の雪害が放牧農家に暗い影をもたらしました。その1つが、人口を都市集中型にしており、現在モンゴルのストリートチルドレンはおよそ3,700人、その半数近くが首都のウランバートルで暮らしています。

ユニセフは、ストリートチルドレンのための事業においては、社会福祉労働省と国立子ども委員会(NCC = National Committee for Children)と協力しながら事業を展開しています。ユニセフの主要なパートナーであるNCCは、首相の特別機関である「国立子ども評議会」の指針のもと、子どもに関する事業の企画と実施とコーディネイトをしている政府機関です。ユニセフは過去10年間にわたり、特に困難な状況にある子どもたちのための共同プロジェクトをNCCと連携して実施しているのです。青少年同盟や子どもの権利センターなどの国内NGO、国際NGOや国連機関もNCCに対して事業協力をしています。

NCCは、電話による緊急コールを受け付けるホットライン事業、家族開発センター(市区町村レベル)への補助、ソーシャルワーカーの養成と研修などを行っています。また、保護者への研修、子どもへの教育と職業技術訓練、そして「チャイルド・トゥ・チャイルド・プロジェクト」を推進しています。1990年に設立されたモンゴル青年同盟が提唱する、子どもたち同士で支えあうことを目的とする「チャイルド・トゥ・チャイルド・プロジェクト」は、学校単位で実施されています。貧困家庭の子ども、障害のある子ども、犯罪をおこす可能性の高い子ども、虐待を受けた、あるいは受けている子どもに対して、同世代の子どもが同世代の子どもに対して財政、介助、アドバイスやカウンセリングなどの支援活動を展開しています。

ストリートチルドレンを増やさないために!!

MONGOLIA STUDY TOUR REPORT

首都ウランバートルでの取り組み

身元確認センター



©日本ユニセフ協会

警察によって路上で生活している子どもが保護されると、まず身元確認センターに収容されます。センターでは保護した子どもに衣服と食事を提供し、健康診断を行います。子どもの身元確認を行った後、基本的には親か保護者と連絡を取って、子どもを引き取るように

すすめますが、親や保護者が拒否したり、子ども自身が拒否したりした場合は、職業教育訓練センターやNGOが運営する子どもセンターを紹介し、こうして、子どもたちは収容されてから2週間以内に親や保護者の元へ戻るか、他のセンターに移っていくのです。1996年の設立以来12,500人が身元確認センターに収容されました。ユニセフは、パトロールカー、コンピューター機器、洗濯機、衣服、毛布などを提供しました。夏にはNGOによってサマーキャンプが運営されています。



©日本ユニセフ協会

家族支援センター

子どもたちが家庭にとどまって家族と一緒に暮らすことができるように、行政のホ口(区)レベルによって、社会福祉労働省のもと家族支援センターと子ども支援センターが運営されています。現在6ヶ所ある家族支援センターでは、貧困家庭の親に対する相談とカウンセリングおよび所得向上対策がとられています。一時的に家族を収容することも可能です。

子ども支援センター

貧困のために中途退学した子どもの補習授業を中心に、正規の学校に復

帰できるようにプログラムが生まれ、ソーシャルワーカーや教員ボランティアが参加しています。ユニセフが運営費の一部を支援しています。また、市行政の青少年開発部の下部組織が、洋裁などの技術習得を目的に、貧困家庭の子どもたちに定期的なコースを実施しています。



©日本ユニセフ協会

地方都市バガヌール(首都より東へ180キロ)での取り組み

家族支援プロジェクト



©日本ユニセフ協会

バガヌールでは、地元からストリートチルドレンを出さないように地域でできる予防事業に取り組んでいます。同地区の貧困家庭10世帯63人に対して所得向上のための野菜栽培を指導して、4ヘクタールの農地を耕作、キャベツ、ジャガイモ、ニンジン、カブを栽培し、市場で販売して所得向上に努めているのです。この農場で研修した後は自分の畑で栽培することになっています。

子ども支援センター

地元の学校を借用して子ども支援センターを開設し、同地区の貧困家庭の子どもで中途退学したり就学できない子どもを対象に授業を実施しています。2000年にセンターの運営を開始し、現在52人(その60%が男子)が学習中です。これまでにセンターにきた子どもたちの半分以上が義務教育修了のテストに合格しています。



©日本ユニセフ協会